

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第414集

K E Y A G Ô
警弥郷B遺跡2

—第3次調査の報告—

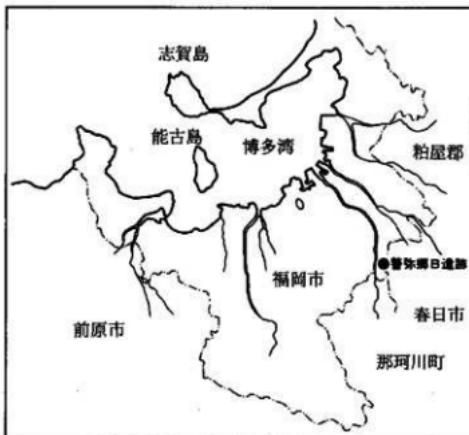


1995

福岡市教育委員会

け や ごう
警弥郷 B 遺跡 2

— 第3次調査の報告 —



遺跡調査番号 9366

遺跡略号 KYB3

1995

福岡市教育委員会

序

福岡市南区一帯から春日市、那珂川町にかけては、大型団地の造成、土地区画整理事業、新幹線博多総合車両基地の設置、さらに近年の新幹線博多南駅の設置などとともに、宅地化が急速に進展してきました。これらの地域には先人たちの遺した貴重な文化遺産が数多く眠っています。

このたび、民間の共同住宅建設とともに、福岡市、春日市、那珂川町にまたがる警跡郷B遺跡の一部を発掘調査致しました。

その結果、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡と大量の遺物が発見されました。この遺跡では、従来、弥生時代でも初め頃の水田は確認されていましたが、集落の存在は今回初めて確認され、しかも、遠く滋賀県からもたらされたという、九州では珍しい手焙形土器の発見もありました。近隣では、かつて、滑石製の模造鏡も採集されたことがあります。この地域が弥生時代や古墳時代にも居住に適した土地であったことを示しています。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上、役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまでに、土地所有者の小田英範氏はじめ、多くの方がたのご理解とご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成6（1994）年3月3日から同年3月31日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う警弥郷B遺跡の第3次緊急発掘調査の報告書である。
2. 警弥郷B遺跡の呼称は1980年発行の「福岡市文化財分布地図（中部・南部）」において整理したものである。1970年発行の「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 第2集」では「警弥郷遺跡」、1972年に実施した山陽新幹線関係埋蔵文化財調査においては「赤永遺跡」と呼称している。1972年の調査地点3カ所のうち、A地点が現在の「警弥郷A遺跡」、B・C地点が現在の「警弥郷B遺跡」に含まれる。なお、弥永遺跡群は現在の春日市弥永地区の一部に相当する。
3. 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居跡をS C、掘立柱建物跡をS B、土坑をS K、溝をS D、柱穴をS P、用途不明遺構をS Xとした。
4. 本書に使用した遺構図は加藤隆也、佐藤保、白井克也が、遺物実測図は重藤輝行、福岡三佐子、白井が作成し、製図は溝保智恵、衛藤琴美、高田佳奈、白井が行った。現場写真、遺物写真は白井が撮影した。
5. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。また、遺構レベルは弥永小学校（H=18.5935m—国土地理院高一）から移動した。
6. 警弥郷B遺跡第3次調査に係る遺物・記録類（図面、写真、スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
7. 本書の執筆・編集は白井が行った。

遺跡調査番号	9 3 6 6		遺跡略号	K Y B 3	
調査地地籍	南区弥永5丁目1番1		分布地図番号	0 4 1 - 0 1 5 8	
開発面積	581m ²	調査対象面積	300m ²	調査面積	300m ²
調査期間	1994年3月3日～3月31日		事前審査番号	5-2-280	

本文目次

序

Iはじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の組織.....	1
II遺跡の位置と既往の調査.....	1
III調査の記録.....	4
1. 調査の概要.....	4
2. 積穴住居跡.....	4
3. 挖立柱建物跡.....	6
4. 土坑.....	8
5. 溝.....	9
IVまとめ.....	16

挿図目次

Fig. 1 調査区位置図 (1/5000)	2
Fig. 2 遺構配置図 (1/125)	3
Fig. 3 SC-01遺構実測図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/2、1/4)	4
Fig. 4 SC-02、SC-03、SC-04、SP-22遺構実測図 (1/20、1/60)、 出土遺物実測図 (1/4)	5
Fig. 5 SC-05、SC-06遺構実測図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/4)	7
Fig. 6 SB-01遺構実測図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/4)	8
Fig. 7 SK-01、SK-02、SK-03、SK-04遺構実測図 (1/40)、 SP-62出土遺物実測図 (1/4)	9
Fig. 8 SD-02、SD-04遺構実測図 (1/60、1/80)、出土遺物実測図 (1/4)	10
Fig. 9 SD-01・SD-03遺構実測図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/2、1/4)	11
Fig. 10 SD-01出土遺物実測図 1 (1/3)	13
Fig. 11 SD-01出土遺物実測図 2 (1/4)	15
Fig. 12 SD-01出土遺物実測図 3 (1/4)	17

図版目次

- P L . 1 (1) 調査区南半 (北東から)
(2) 調査区北半 (北から)
(3) SP-22 (北から)
(4) SC-05 (東から)
(5) SC-05とSD-04 (西から)
(6) SC-06 (東から)
- P L . 2 (1) SB-01 (東から)
(2) SD-02 (南から)
(3) SD-04 (南西から)
(4) SD-01・SD-03 (北東から)
(5) SD-01鉄斧出土状況 (南東から)
- P L . 3 出土遺物 1~33 (番号は実測図と一致する)
- P L . 4 出土遺物34~66 (番号は実測図と一致する)

I はじめに

1. 調査に至る経過

1993年(平成5年)10月14日付で、南区弥永5丁目1番1における埋蔵文化財事前審査願が埋蔵文化財課に提出された。申請地は警弥郷B遺跡の東側隣接地とされていたので、試掘調査を同年10月26日に実施した。試掘は東西方向のトレンチを2本設け、その結果、ピットと溝を検出した。遺構面の上の包含層からは、弥生土器、土師器が出土し、弥生～古墳時代の集落が存在することが推察された。以上の結果から、遺跡の存在が明らかとなったが、申請地に予定される6階建てのマンション建設は、遺跡への影響が大きく、関係者との協議の結果、建物の建設予定部分について、記録保存のための本調査を実施することになった。本調査は1994年3月3日から着手した。

2. 調査の組織

調査委託：小田英範

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 尾花 崑

調査統括：文化財部長 後藤 直

埋蔵文化財課長 折尾 学

埋蔵文化財課第二係長 山崎純男

調査庶務：埋蔵文化財課第一係 吉田麻由美(前任) 西田結香

調査担当：埋蔵文化財課第二係 白井克也

試掘調査：埋蔵文化財課第二係 菅波正人

調査作業：阿部高士 鮎川恭子 石川洋子 岩本三重子 楠林司朗 古賀典子 小原義行 佐藤保品川厚 田中トミ子 中川原美智子 播磨千恵子 藤野信子 真崎成美 持丸玲子
森田祐子 森山キヨ子

整理補助：福岡三佐子

整理作業：石谷香代子 衛藤琴美 兼田ミヤ子 加集和子 小林義徳 高木啓太 高田佳奈
高手与志子 寺嶋道子 中澤久美 野口リュウ子 羽岡正春 平井武夫 別府俊美
満保智恵 水田ミヨ子 宮路由香 安高久子 山口守人 山本良子

II 遺跡の位置と既往の調査

警弥郷B遺跡は那珂川中流右岸の標高約18mに位置する。春日市との境に位置するため、遺跡の範囲は確定しない。北に警弥郷A遺跡、東に弥永遺跡等が所在する。また、南東500mに日押塚古墳が所在するほか、西に老司古墳、南に貝殻寺古墳やウト口古墳など、古墳も周辺に散在する。

1970年の地名表では、周辺の遺跡と合わせて「警弥郷遺跡」とされている。未だ発掘調査はされていなかったが、古式土師器の壺、小型丸底壺、器台、滑石製模造鏡が採集されていた〔塩屋1970〕。山陽新幹線路線内の発掘調査では、本遺跡周辺は「弥永遺跡」として3地点が調査されたが、確実な遺構は確認されず、出土遺物も弥生時代前期～中期を中心とするものであった〔塩屋・折尾1975〕。その後、「福岡市文化財分布地図(中部・南部)」(1980)において、山陽新幹線路線内の「弥永遺跡A地点」は「警弥郷A遺跡」に、「弥永遺跡B地点」・「弥永遺跡C地点」は「警弥郷B遺跡」に改められた。改称後の第2次調査〔下村1992〕では、弥生時代前半の水田が検出された。

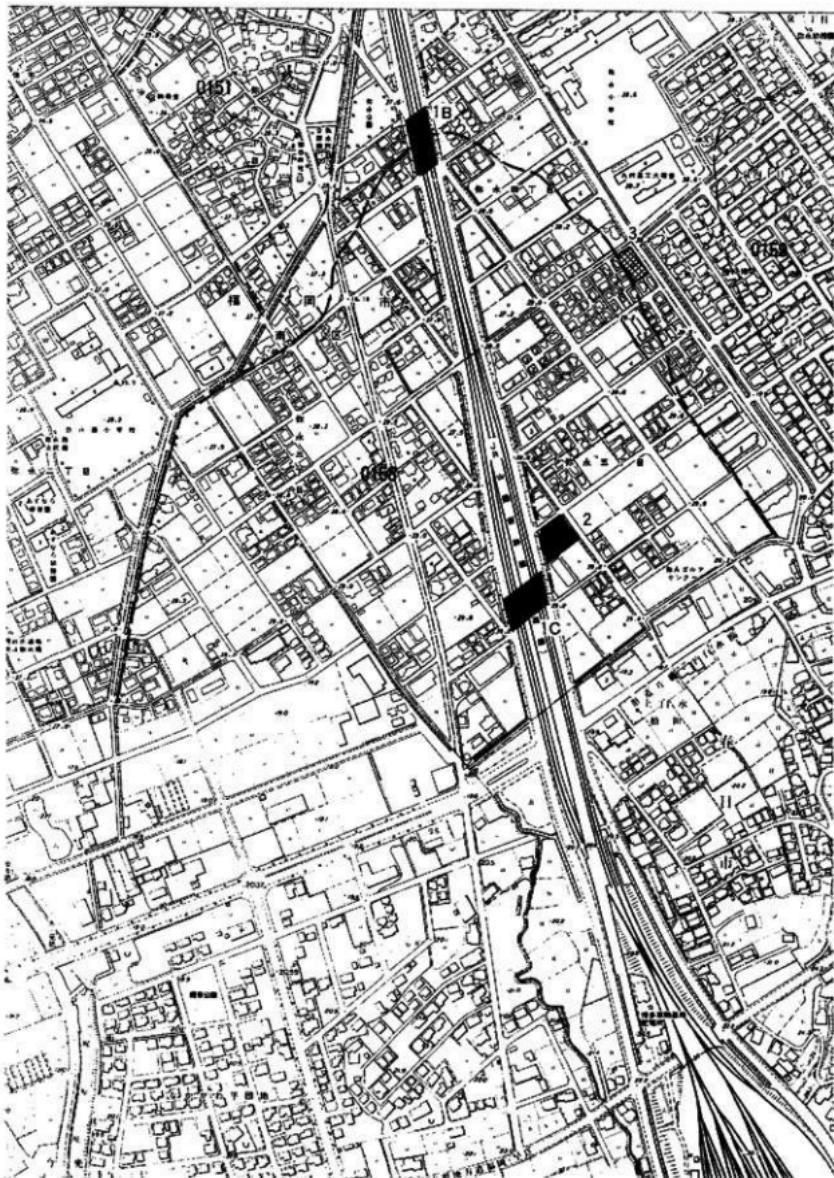


Fig. 1 調査区位置図 (1/5000)

IB: 第1次調査 (赤水道路B地点)
IC: 第1次調査 (赤水道路C地点)
2: 第2次調査
3: 第3次調査 (今回報告分)



0 10m

Fig. 2 造構配置図 (1/125)

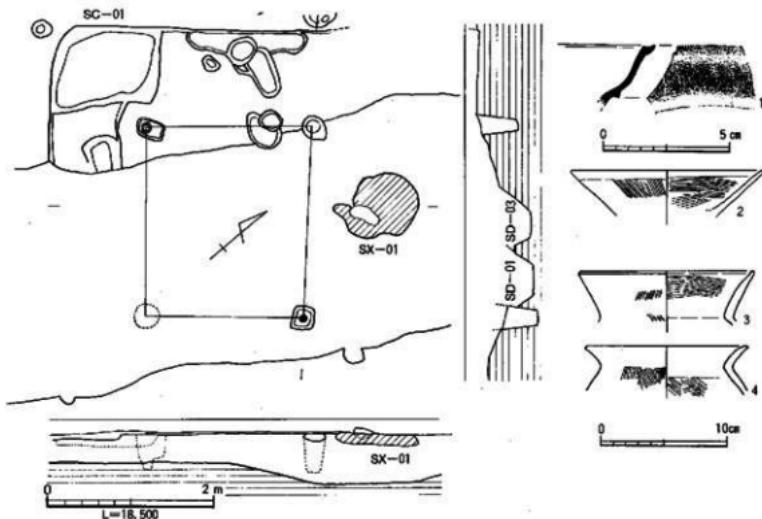


Fig. 3 SC-01遺構実測図 (1/60)、出土遺物実測図 (1/2, 1/4)

III 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig. 2, PL. 1(1)(2))

調査対象地300m²のうち、北半をまず調査し、然る後に南半を調査することとし、それぞれ、まず重機で表土である耕作土を除去し、地山の黄褐色粘質土上面で遺構を検出した。試掘調査時に存在が予想された包含層は、重複した竪穴住居跡とわかった。即ち、厚さ約30cmの耕作土の下はすぐに遺構面となっており、耕作により若干の削平を受け、調査区の北西隅では、耕作による溝状の平行な攢乱がみられた。遺構は竪穴住居跡6棟、掘立柱建物跡1棟、溝4条、土坑10基、柱穴多数を検出した。

2. 竪穴住居跡

SC-01 (Fig. 3) 調査区中央付近に所在するが、削平により遺存状態は極めて悪く、南西コーナー付近のみ遺存していた。SD-01南側にも延びていたはずだが、削平により失われている。重複する SD-01・SD-03の確認時、SC-01付近の溝覆土上にロームブロックが散在していることが観察され、SC-01の貼床残片とみられる。主柱穴としてピット3基が認識される。第4の柱穴想定位は SD-01覆土中であり、調査後に SD-01の廃棄土器の分布を検討した結果、この地点だけ遺物が空白になっているとわかった。また、SD-01覆土上に焼土の集中する地点 (SX-01) があり、削平と攢乱で破壊されているものの、位置関係から SC-01に伴うカマドとみられる。SC-01は、SX-01をカマドとする一辺4.5m程度の方形住居跡であろう。

掘方検出時に土器片少量が出土した (1・2)。1は須恵器縁の口縁部であり、SC-01の所属時期の上限を示す。また、3・4は SX-01より出土した。

SC-01は5世紀後半～末頃に位置づけられよう。

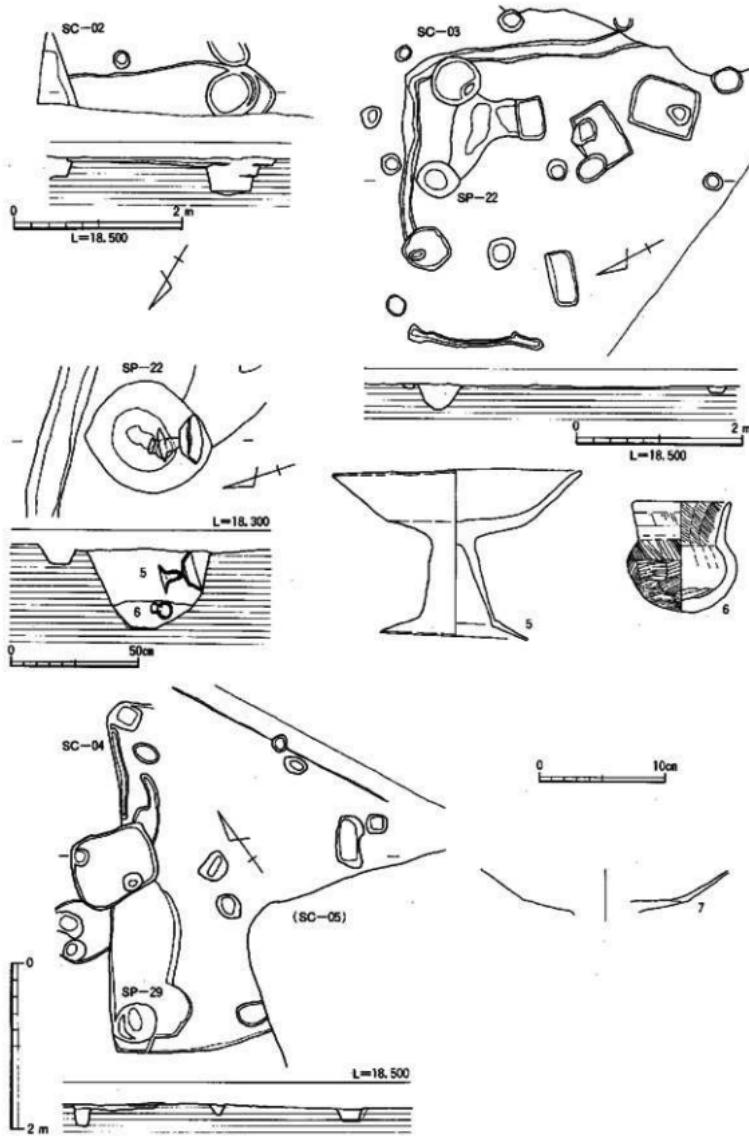


Fig. 4 SC-02, SC-03, SC-04, SP-22造構実測図 (1/20, 1/60)、出土遺物実測図 (1/4)

SC-02 (Fig. 4) 調査区北東隅に検出された遺構で、全形がわからず、遺存もよくないが、堅穴住居跡の掘方様であるとみた。東西2.5m以上、南北0.7m以上。

出土遺物として古式土師器片が出土したが、図化に耐えるものはなかった。

SC-03 (Fig. 4) 調査区の西辺沿いにめぐる溝によって認識された。ほぼ床面まで削平されているとみられる。東西3.6m、南北3m以上である。壕溝の深さは最大9cmが遺存している。

SP-22 (Fig. 4, PL. 1(3)) SC-03内で確認された。SC-03が床面まで削平されていたため、SC-03との関係は不明であるが、ここで報告する。円形ピットで、底は捕鉢状である。

完形の小型壺（6）がピットの底に横向きに、高杯（5）が口縁部を壁面に接するような状態で出土した。5は摩滅が著しいが、脚部内面にヨコ方向のケズリが観察される。6は外面全体にハケメを施し、口縁部のみヨコナデを加えている。内面にはケズリが観察される。いずれも布留式新段階に並行するものであろう。5世紀後半に位置づけられる。

SC-04 (Fig. 4) SD-01の東側で検出され、SC-05によって東側が切られている。床面近くまで削平されており、南北4.3m程度である。

出土遺物としては、西隅のSP-29より出土した土師器高杯（7）のみを図示した。

SC-05 (Fig. 5, PL. 1(4)(5)) 調査区東辺近くで検出された。SC-04、SC-06、SD-04を切っている。東北隅が調査区の外に出ているが、ほぼ全形を窺うことができる。長軸を東西方向に向かって、東西（長軸）約6.4m、南北（短軸）4.5mである。SP-43とSP-78を主柱穴とするものとみられる。北西隅付近と南東隅付近に粘土を貼ったベッドがL字状に一部遺存するが、本来は全周していたものとみられる。炉は確認されない。SC-05以前の溝SD-04とあまり時期差がなく、SD-04の覆土を少し深めに掘り込んで、ベッド以外ではこの部分のみ厚めの貼床にしている。

床面から上師器が数点検出された。9は南壁中央近くのSP-42から出土したが、隣接する床面の浅い掘り込み（SP-101とする）から出土した土器片と接合した。SP-101出土上器片を床面出土と扱うか、掘方出土と扱うか、問題はあるが、SC-05の造営時か廃棄時にSP-42が開口していたことを示す。10は器台の脚部と思われ、接合部で剥離した面に隆線がある。杯部側の接合沈線の痕跡がみられる。11は内面にハケメが観察される。住居北隅の床面に立った状態で検出された。

出土土師器は布留式中段階に位置づけられ、SC-05は古墳時代前期に位置づけられる。

SC-06 (Fig. 5, PL. 1(6)) SC-05の南側で検出された。SC-05とSD-04に切られるなどして、正確な範囲はわからないが、東西4.3m以上、南北3.4m以上である。主柱穴ははっきりしない。東壁沿いにベッドが遺存している。遺物も極めて少ないが、高杯脚部（15）と壺底部（16）の破片を図示した。SC-06は弥生時代終末に位置づけられる。

3. 埋立柱建物跡

SB-01 (Fig. 6, PL. 2(1)) SD-03西側で検出された3間×3間の総柱建物跡であり、東西6.14m、南北6.40mを測る。南西隅に存在すべき柱穴は調査区外のため確認していないが、SP-13の名称を与えた。柱穴はいずれも東西40~65cm、南北25~30cmの長方形をなし、覆土は黒褐色粘質土である。

柱穴のうち、南東隅のSP-16はSD-03の覆土を切っており、他の柱穴よりはるかに深いことも、SD-03と重複したためと考えられる。また、SP-16に相当する位置にもSD-01上層の土器が統いでおり、SP-16(SB-01)よりもSD-01が遅れて埋没したとみられる。また、SP-12は、SC-01の貼床の下で検出されている。即ち、SB-01はSD-03より新しく、SD-01やSC-01より古い。

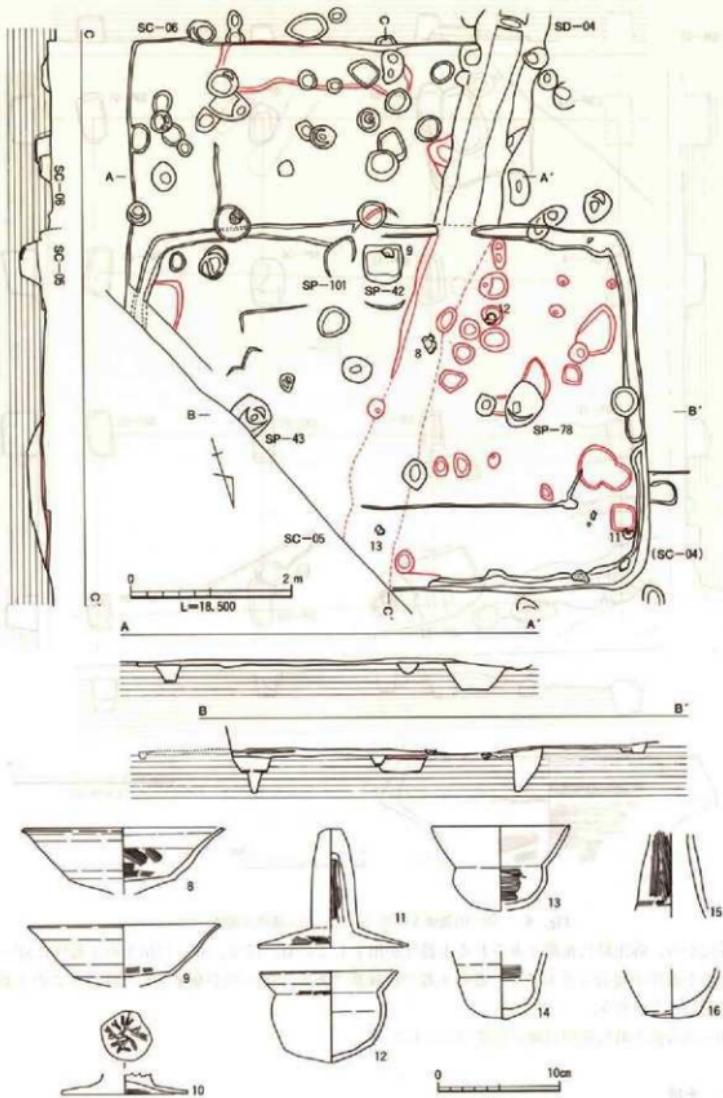


Fig. 5 SC-05、SC-06遺構実測図(1/60)、出土遺物実測図(1/4)

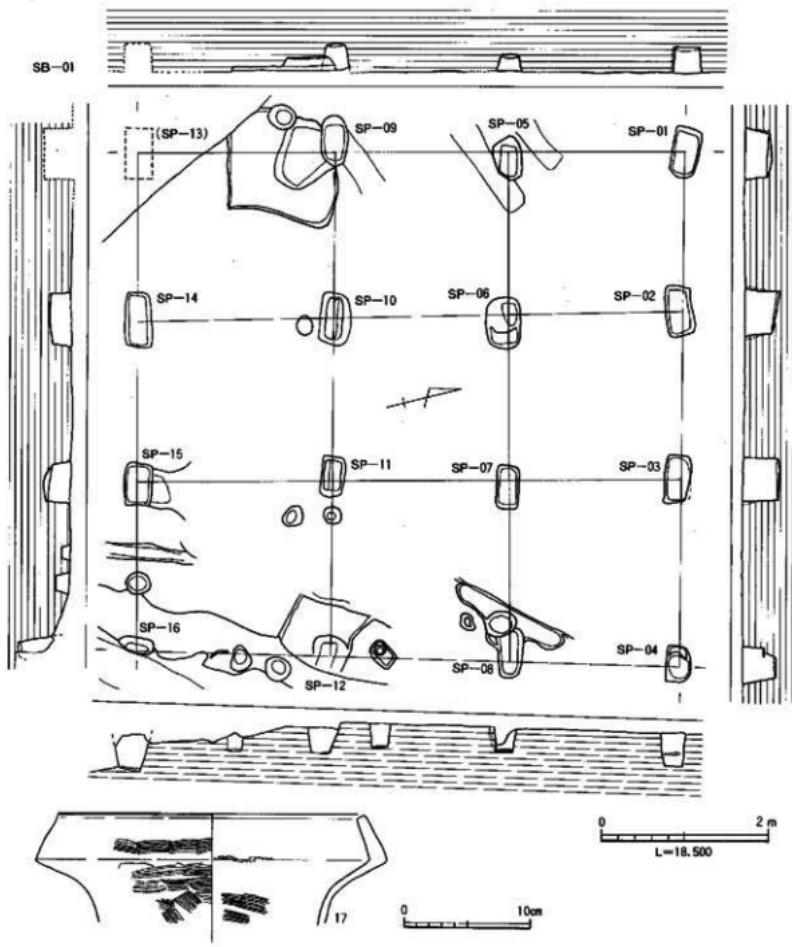


Fig. 6 SB-01遺構実測図(1/60)、出土遺物実測図(1/4)

柱穴から、弥生時代後期とみられる土器片が出土している。17は、SP-11出土の土器片とSP-15出土の土器片が接合したもので、壺形土器の口縁部である。SB-01が廃棄された時点をこの土器から推定してよからう。

SB-01は弥生時代後期に位置づけられる。

4. 土坑

調査区北隅近くに互いに近接して確認された4基についてのみ記述する。

SK-01 (Fig. 7) 東西1.85m、南北0.6~0.8m、残存する深さ25cmの長方形の土坑であり、床

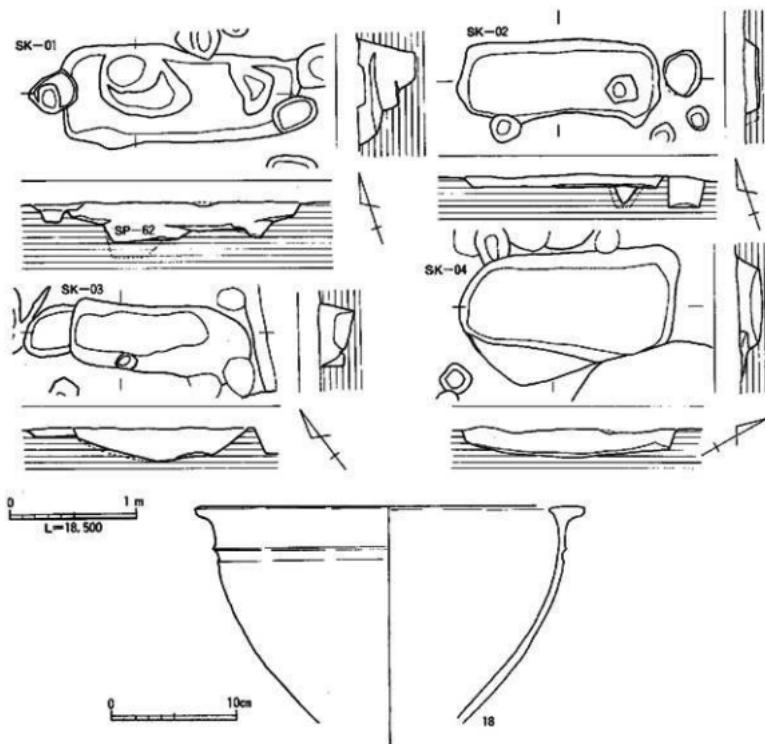


Fig. 7 SK-01, SK-02, SK-03, SK-04 遺構実測図 (1/40)、SP-62出土遺物実測図 (1/4)
面に2カ所ピットが確認された。

遺物はほとんどなく、床のピットSP-62から、弥生時代中期の壺が出土した(18)。

SK-02 (Fig. 7) 東西1.6m、南北0.6~0.7m、残存する深さ10cmの長方形の土坑である。出土遺物はほとんどなく、図示できない。

SK-03 (Fig. 7) 東西1.4m、南北0.5m、残存する深さ30cmの隅丸長方形の土坑である。出土遺物はほとんどなく、図示できない。

SK-04 (Fig. 7) 南北1.7m、東西0.5~0.7m、残存する深さ23cmの台形状の土坑である。出土遺物はほとんどなく、図示できない。

5. 溝

4条がほぼ平行し、いずれも断面逆台形状を呈する。

SD-02 (Fig. 8, PL. 2(2)) 調査区北西隅で確認された。幅60cm、深さ20~50cm。断面逆台形状をなし、一部で2段になっている。古式土師器片が若干出土し、布留式の古い部分に並行する。

SD-04 (Fig. 8, PL. 2(3)) 調査区の南寄りで確認された。幅80cm、深さ60cm。断面逆台形状

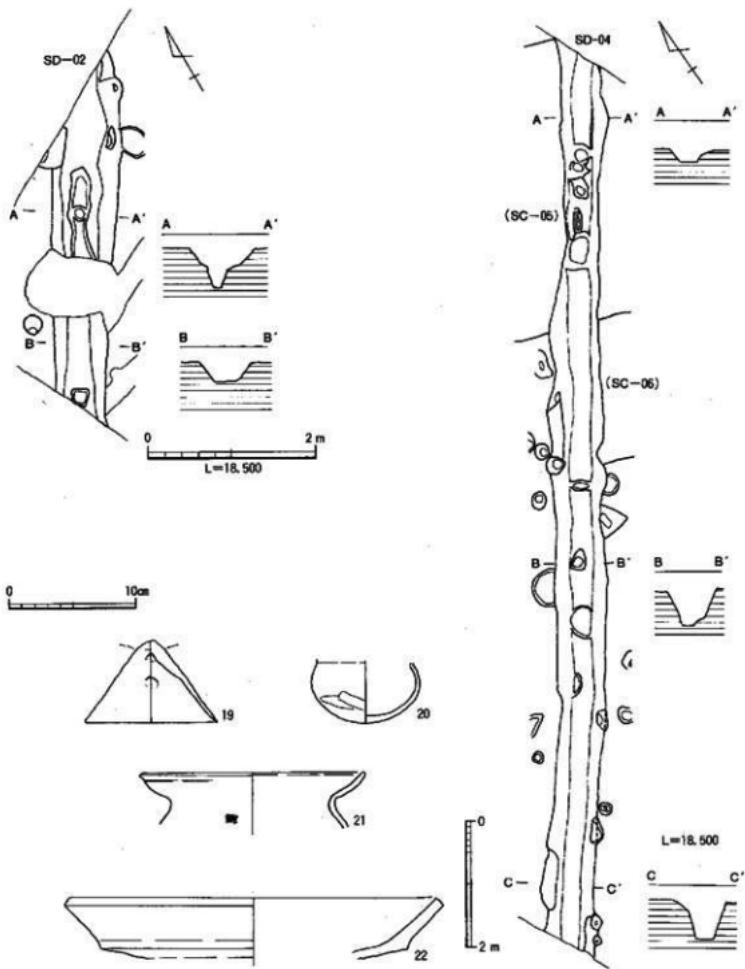


Fig. 8 SD-02, SD-04遺構実測図(1/60, 1/80)、出土遺物実測図(1/4)

をなす。覆土はしまりの悪い黒色粘質土で、ロームブロック等は全く含んでいない。SC-05に切られた部分では、SD-04の覆土をやや深めに掘り下げて、ロームの貼床を厚めにしている。

出土遺物は少なく、ほとんどが破片であった。19は器台の脚部である。20は小型丸底壺で、外面にヘラケズリがみられる。22は壺の口縁部であろう。以上より、SD-04は布留式に並行し、SC-06以後、SC-05以前である。

SD-03 (Fig. 9, PL. 2(4)) 調査区中央付近で検出された、重複しつつ平行する南北方向の溝2条の、東側をSD-01、西側をSD-03とした。土層断面では識別できなかったが、SD-01上層に多量

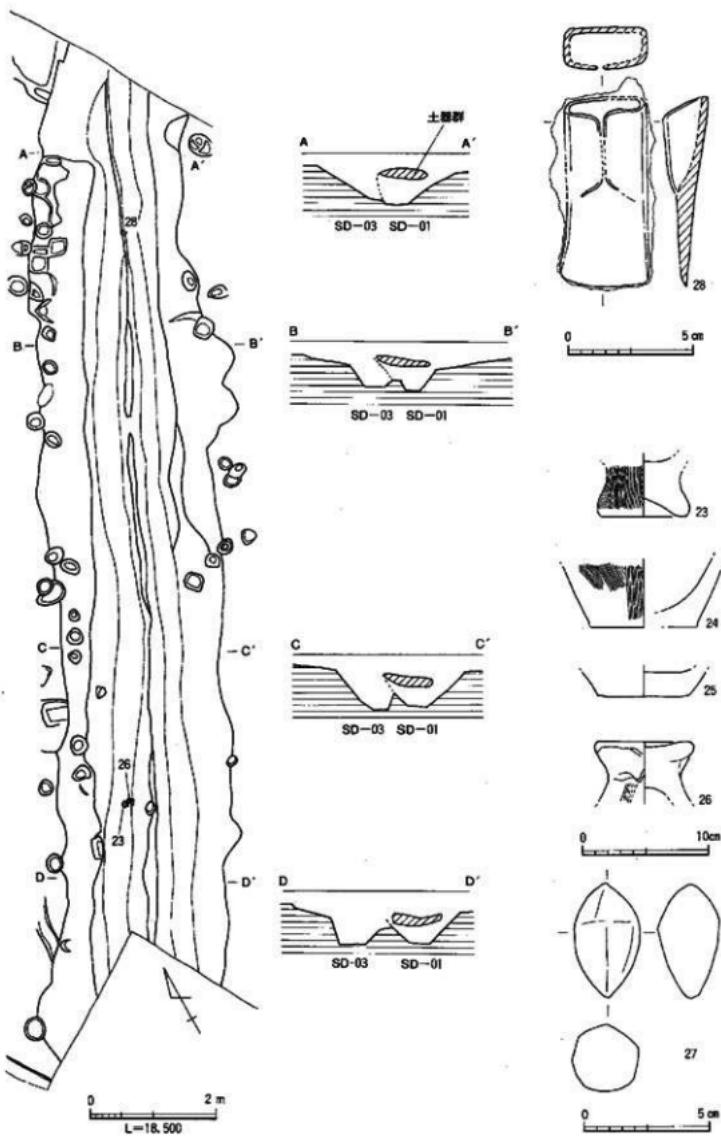


Fig. 9 SD-01・SD-03遺構実測図 (1/80)、出土遺物実測図 (1/2、1/4)

に廃棄された土器の広がりから、SD-03が古く、SD-01が新しいと判断した。

SD-03は断面逆台形を呈し、深さは60cm程度、黒褐色粘質土を覆土とするなど、形状・深さ・覆土ともSD-01に酷似するが、土器の廃棄行為はみられない。SB-01を構成するSP-16に切られる。確実にSD-03出土とみなしうる遺物は少量で、弥生時代中期に属するが、溝自体をこの時期に当てるべきか、検討を要する。26は土製支脚であり、上面と脚部を貼り合わせ、外面に素地土を補って作っている。27は投弾であろう。

SD-01 (Fig. 9~12, PL. 2(4)(5)) 断面逆台形状を呈し、確認面からの深さは50cm程度である。覆土は黒色粘質土であり、水の流れた様子はない。

上層から土器が多量に出土したが、土器群は西が高く、東が低いので西からの投入が推定される。出土遺物のはほとんどは土師器であり、高杯と丸底壺が多く、完形品が大半である。弥生土器も少量みられたが、調査区の南寄りに多く、完形に復元されるものはなかった。須恵器は全くみられなかった。古墳時代前期に廃棄行為が行われたとみられる。出土遺物はSD-01だけで50箱に及び、整理が充分及ばなかった上、紙数も限られているので、一部を報告するに止めざるを得ない。

28は鍛造鉄斧である。下層から出土した。全体に錫化しているが、完形で、手に持つと重い。

29は九州出土例としては希有な、ほぼ完形に復元される手焙形土器である。全体に白色を呈し、小蝶若干を含む。覆部口縁前面の浮線2条のほかに装飾はない。覆部口縁前面には赤色を呈する部分があり、赤色顔料かと思われる。鉢底部内外面に黒色の部分がある。鉢部は外面に細かく、内面に粗いハケメを施している。鉢底部外面は欠損と摩滅により調整が不明瞭だが、わずかに観察される砂粒の移動はハケメを示唆する。鉢底部内面はヨコ方向にヘラケズリが行われている。覆部は内外面ともタテ方向のハケメが、やはり外面に細かく、内面に粗く施されている。

断面に擬口縁や接合痕が観察され、製作技法が推し量られる。①は鉢部の本体であり、受口口縁の鉢として作られている。②は覆部の本体であり、壺状の原形を裁断して作っている。というのも、鉢部上に素地土を巻き上げていくなら岡の如き素地土③a・③b・⑤の補填は行うまいし、湾曲した板状の素地土を作成したり板状素地土をたわませるより、壺を裁断する方が容易と思われるからである。覆部に残る接合痕も、こうした推測を支持しよう。②はハケメなどの調整の後、①の口縁部にすっぽりはめ込み、接合部外面に素地土③aを補填し、上方にナデツケている。鉢口縁部でも、③aに合わせるように素地土③bを截せ、上面を平坦に整えている。さらに、鉢口縁部の③b内面に素地土④を補い、内面を覆部下端と一連のものにしている。接合部内面にも薄く素地土⑤を塗りつけ、下方にナデつけている。痕跡は明確でないが、覆部内面のハケメの遺存状況からみて、上方にもナデツケたであろう。④・⑤は一部に重複があり、先後を知ることができる。

鉢部・覆部の接合後、覆部口縁に平坦部を接合するが、平坦部は内外2部品からなり、内外から③b・④を挟むように接合し、平坦部前面は丁寧にナデ、内面は素地土を補って接合を強化したユビ跡が一部に残る。平坦部前面には浮線2条を貼りつけたほか、赤色顔料も塗布したようである。

手焙形土器の用途には諸説あるようだが、本例で示唆深いのは鉢底部内外面の黒変である。外面のそれは焼成直後に生じた黒斑ともみられようが、内面の対応する部分の黒変域の方が広いのは、黒斑としては不審である。また、黒変域は周縁しか遺存せず、中心に当たる部分は失われているが、欠失部近くの黒変域内面には剥離が生じ、断口まで黒変している。付近で出土した底部らしき破片（本例と直接には接合しない）は、胎土、器厚、ハケメから同一個体とみられるが、2次被熱して黒色ないし暗赤色を呈し、硬質化している。以上から、本例には鉢部で火を焚いた可能性がある。しかし、破損はしているものの被熱域は小さく、覆部に被熱痕跡がみられないことからして、焚いた火は小さく、

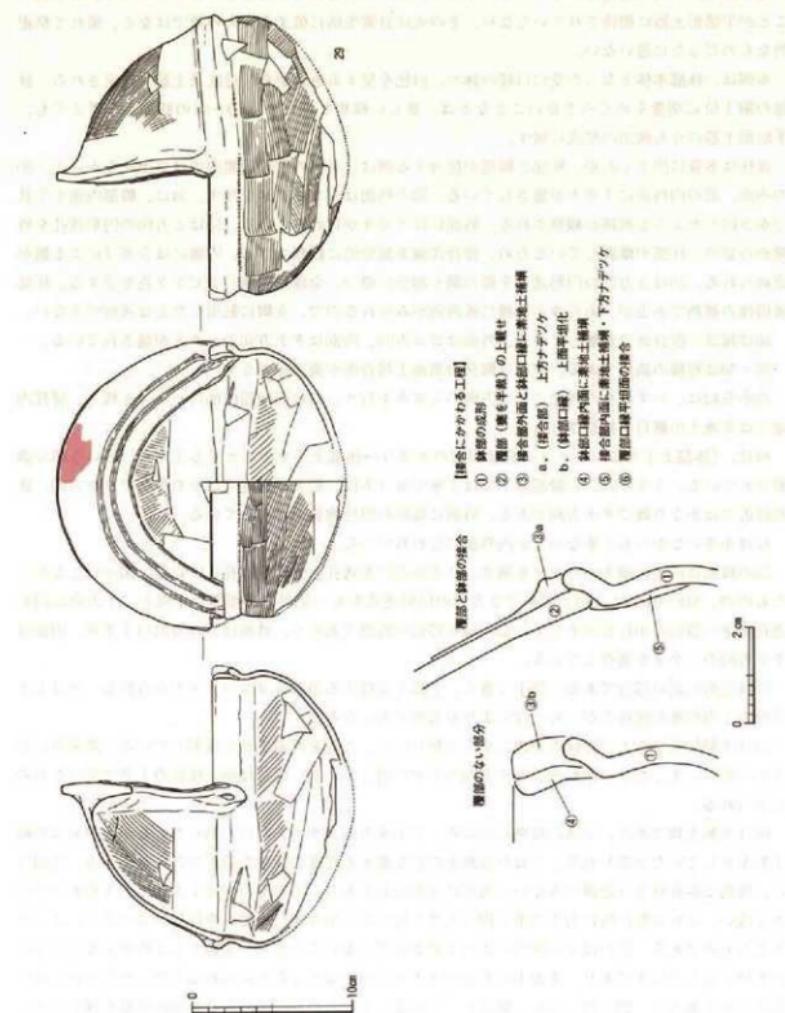


Fig. 10 SD-01出土遺物実測図 1 (1/3)

わずかな時間で燃え尽きてしまうようなものであったろう。全国の手焙形土器の例にも、内部で火を焚いた痕跡が観察されたものがあり、祭祀に関わる灯火具として手焙形土器を解釈する説も出されていると聞く。本例に想定されるような「小さく、わずかな時間で燃え尽きてしまうような」火を焚くことが手焙形土器に期待されていたなら、その火は日常生活に供する火力の源ではなく、優れて祭祀的なものだったに違いない。

本例は、鉢部本体となった受口縁の鉢や、白色を呈する色調から、近江系上器と推定される。鉢部の胴下位に突帯をめぐらさないことなどは、新しい様相とみられ、SD-01の時期から考えても、手焙形土器のうち後出の型式に属す。

高杯は多量に出土したが、杯部と脚部が接合する例は、今回の整理期間内では見出せなかった。30の内面、32の内外面にミガキが施されている。33の外面はヨコハケメを残す。34は、脚部内面を工具でかき回したような痕跡が観察される。外面にはミガキが行われている。58は2方向の円形透孔を外側から穿つ。杯部が離脱しているため、接合沈線を部分的に観察できる。内面にはシボリによる皺が認められる。59は3方向の円形透孔を脚の開く部分に穿つ。全体に被熱してピンク色を呈する。杯部破損後の被熱であるが、あらゆる器種に被熱例がみられるので、支脚に転用したとは速断できない。

36は脚部が接合面で剥離している。外面はヨコ方向、内面はタテ方向のミガキが施されている。

37・38は短脚の高杯である。37では脚部の素地上接合面が擬口縁をなす。

39から42は、いずれも内外面にヨコ方向のミガキを行う。43は口縁部内面にハケメを残し、肩部内面には素地土の継目が観察される。

44は、[体部上半のヨコハケメ→底部周辺のケズリ→体部上半を中心とするミガキ]という順で調整されている。ミガキは、口縁部直下では丁寧でヨコ方向、最大径付近ではやや疎らでヨコ方向、底部付近ではかなり雑でタテ方向である。外面に煤状の黒色物質が付着している。

47は小さいながらも丁寧なハケが内外面に行われている。

53の脚部は内面に細かいハケメを施す。2方向の円形透孔を外から穿孔している。図示はしなかったものの、SD-01では、53と同形で2方向の円形透孔をもつ完形の小型器台1点と、4方向に円形透孔を穿つ器台の小片も出土している。54も器台の脚部であろう。外面はヨコ方向のミガキ、内面はタテ方向のハケメを遺存している。

55は完形に近い器台である。厚手で重く、土器を支持する面のみヨコハケメがみられる。56は上半2分の1周程度の破片だが、もともと55よりも大型であったろう。

57は上製勾玉である。紐状の素地土を二つ折りにし、これを湾曲させて成形している。湾曲時に勾玉の「背」に生じたひび割れを、タテ方向のナデで消している。穿孔は細い棒状の工具で突いたものとみられる。

60は上製支脚であり、全体に被熱している。上半を失い、タテ方向にも割れているが、本来は鳥帽子形を呈していたと思われる。こねた素地土の形を整える程度の簡単な造形で作られている。肉眼では、特別な混和材等は認識できない。後部に4個の穴があり、上のものが深く大きく、下のものが小さく浅い。これは製作時に右手の第2指（人差し指）から第5指（小指）を押し当てたことによって生じたものである。穴がほかの操作によって消されていないことから、支脚としての形をなしてから指を押し込んだはずであり、素地土がもはやあまり柔らくなかったとみられるので、かなり強く押し込んだのであろう。強く押し込み、修正もしていないところから、この穴は意図的に指を押し込み、使用時の把手の役割を担わせたものとみられる。鳥帽子形の土製支脚には、背にヒレ状の把手をつけたり、60のように指跡を把手代わりとする例がみられるようである。指跡の大きさからみて、乾燥

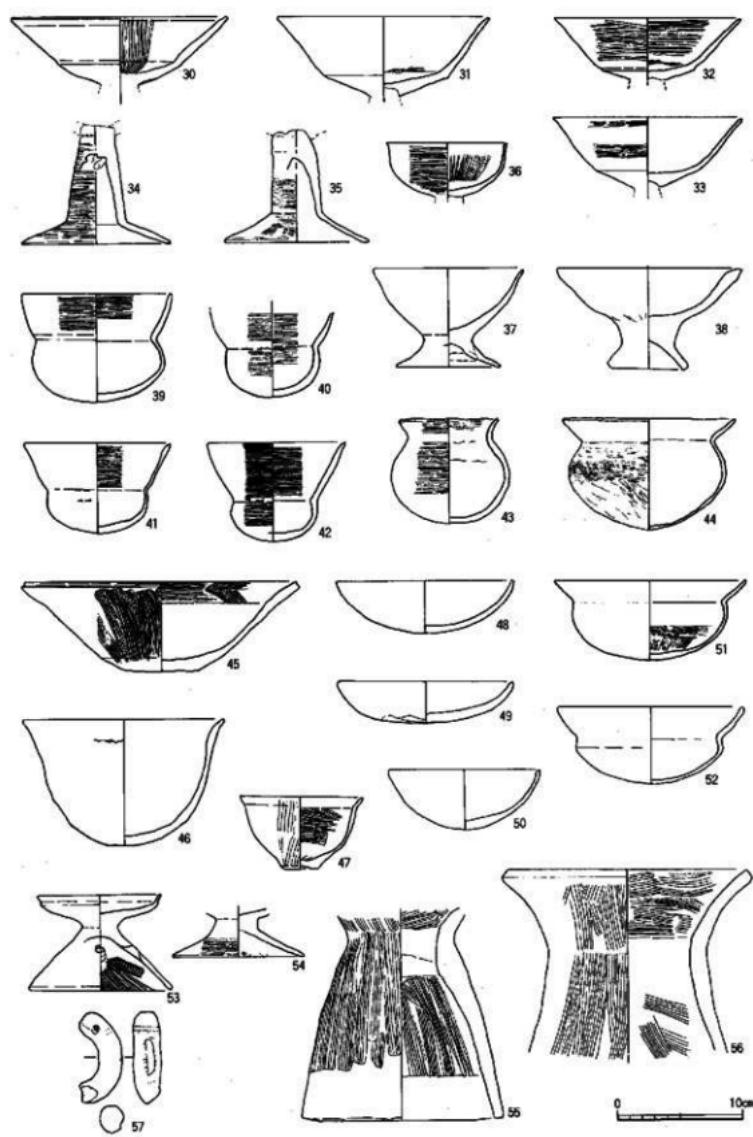


Fig. 11 SD-01出土遺物実測図 2 (1/4)

時・焼成時の収縮を勘案しても、手のあまり大きくなかったと思われる。

61の甕は口縁部を欠いている。胴部にヨコ方向の平行タタキメを残す。肩部にヨコハケを行いそのまま下方に垂下せるようにハケメを伸ばしている。そのため、肩部の一部のみヨコハケメがめぐってタタキメを消し去っているが、口縁部直下はタタキメが残り、胴部もタタキメがかなり遺存している。内面は下半がタテ方向ケズリ、上半がヨコ方向ハケである。

62は甕的最大径部以上の破片である。全体に粗い作りで、気味の悪い印象を与える。口縁部外面や胴部内面に紐状素地土の接着痕をみるとできる。胴部内面のそれは、1周分の紐状素地土の始点と終点の重ね合わせまでみることができる。内外面にはハケが施されているが、いずれも器表があまり乾かず、可塑性を多く残した時点では不整方向に行われており、器面の凹凸も激しい。

63は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面がナナメハケ、胴部内面がケズリとみられるが、摩滅が著しく、不明確である。肩部と口縁基部に素地上の継目がみられ、口縁部直下の厚さからみて、胴部形成後に肩部内面に貼り付けるように口縁部用の素地土を積み上げたものと思われる。

64は、口縁部と底部を欠くが、底部側の器壁が厚い。遺存部分の上端で、内面に素地土の継目がみられる。外面は肩部にヨコハケ、それ以下にタテハケ、内面にはタテナデがみられる。被熱しており、外面に剥離が多く認められ、調整がわかりにくい。

65は二重口縁の壺形土器である。器壁が全般に薄く、脆いが、底部を除いてほぼ完形に復元された。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケメが施されている。胴部外面のハケメはタテ方向ハケメの後ヨコ方向のハケメを施しているが、肩部以外では摩滅のためハケメが明瞭でない。胴部内面はヨコ方向のケズリ調整のようだが、単位を認識できない。

66は直口壺である。胴部に比べ口縁部の器壁が厚い。素地土接合位置でのヨコ方向の割れが數か所見られる。胴部外面は全体にハケメを施し、下位にはヨコ方向の平行タタキメが残っている。胴部内面は下位でタテ方向、中上位で斜方向のケズリが行われているが、肩部では指跡もみられる。口縁部との変換点近くでは内面調整が不明確になるが、この位置での器壁の厚さからみて、口縁部用の素地土を肩部内面に貼り付けたためであろう。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、口縁部内面はヨコ方向のハケメがみられる。口縁部近くに竹管押捺紋が2カ所施されている。いずれも左側に細くなつた部分があり、竹の枝が分かれた少し上の部分を原体としたことがわかる。外面に煤が付着している。

以上より、SD-01は布留式中段階頃に並行するであろう。

IV ま と め

今回の調査のまとめとして、遺跡の範囲、集落の変遷、手焙形土器の意義の3点に絞って略記する。

誓弥郷B遺跡では、これまでにも土師器や滑石製模造鏡が採集されるなどしていた〔塙屋1970〕が、発掘調査では弥生時代の水田遺構等しか確認されていなかった〔塙屋・折尾1975; 下村1992〕。古墳時代の集落は今回初めて確認されたのである。わずかな知見からではあるが、予想される旧地形・集落の範囲について触れておきたい。

遺跡隣接地とされていた今回の調査地点で確認された住居跡や溝、特に、直線的で、かつては平行している数条の溝は、旧地形や集落の範囲について再考を促すものであろう。削平以前の地形を考えると、SD-01・SD-03の北西側で遺構が浅く、南東側で深いこと、遺構検出面であるローム層も北西側で黄褐色、南西側で暗褐色であることからみて、誓弥郷B遺跡の範囲のうち北側の一角が、この集落の最高所であり、中心であったものと推察される。また、溝の方向からみて、集落の北東端は、

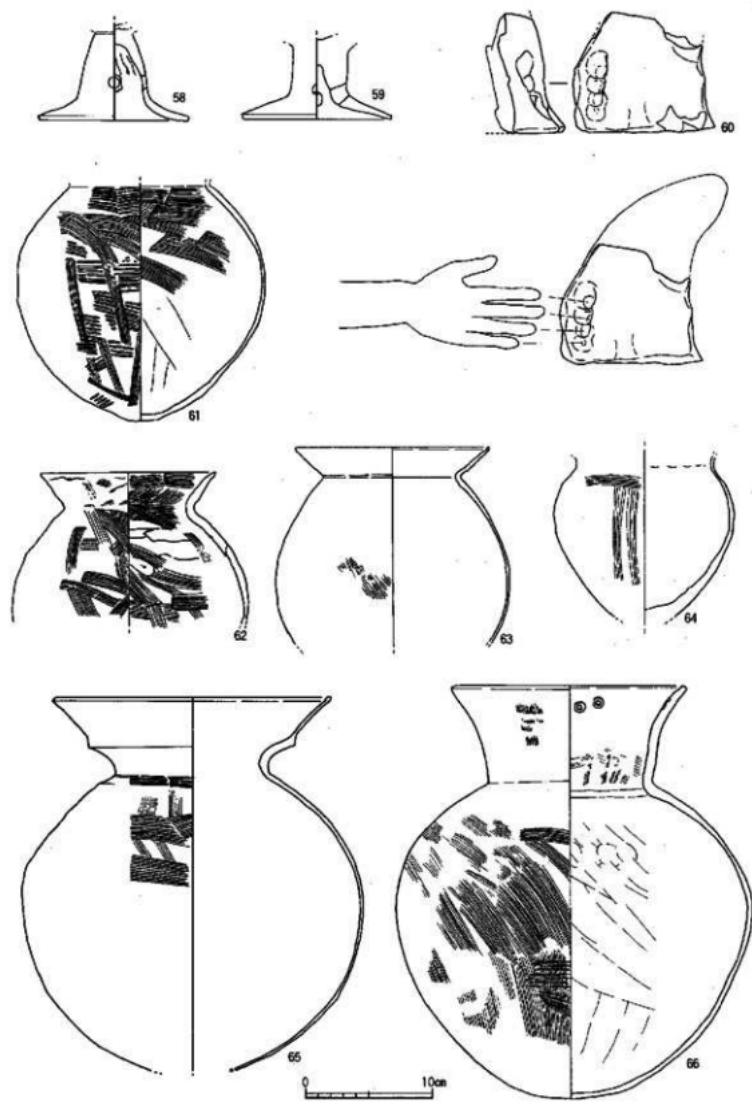


Fig. 12 SD-01出土遺物実測図 3 (1/4)

これまで想定されていた遺跡の範囲より、幾分はみ出こととなろう。第2次調査で標高約16.5m地点から検出された水田の存在を勘案すれば、警弥郷B遺跡の北半は集落遺跡、やや低い南半は水田遺跡であると考えられる。ただし現時点では、集落と水田に時期的な重複は認められない。

次に、警弥郷B遺跡北半集落の東縁に当たるであろう今回の調査遺構を時期別に概観する。

今回検出された最も古い時期の遺物は弥生時代中期に遡る。SK-01下のSP-62から出土した甕がそれである。SP-62やSK-01、また、やはり弥生中期土器片を出土したSD-03が、この時期に該当するかどうか疑問も残るが、土器片が多く見出されることは、集落が弥生中期頃から営まれ始めたことを示していよう。

弥生時代後期から終末にかけてSB-01とSC-06が営まれるが、これは、集落がこの時期に至って東方に拡張し、今回の調査地点に及んだことを示していよう。

古墳時代前期に入って、SD-02、SD-04、SD-01のような溝と、SC-04、SC-05のような堅穴住居跡が営まれる。この中でも、SD-02、SD-04、SC-04が古く、SD-01、SC-05が新しいという関係にあろう。今回の調査ではこの時期の遺構が最も多いが、遺存している限りでは、遺構の密度はさほど濃くはない。集落の端に当たるためであろう。SD-03も、深さ、方向、断面形、覆土の状況など他の溝と同様であるので、あるいは古墳時代に降るかもしれないが、その場合はSB-01も時期を下げるべきである。

5世紀には遺構はさほど多くないが、SC-01のように堅穴住居跡も営まれている。このSC-01を最後に、遺構・遺物は認められない。

以上のように、警弥郷B遺跡北半に想定される集落は、弥生時代中期に始まり、後期に拡大し、古墳時代前期に最盛期を迎え、5世紀には縮小したことがわかる。5世紀末以降は、集落が縮小したのかも知れないが、日押塚古墳と至近であるという立地を考えると、日押塚古墳、あるいはそれに関係する何らかの事情に絡んで、土地利用に対する何らかの規制が設けられ、集落が廃絶を余儀なくされたという可能性も指摘できよう。

集落の最盛期における手焙形土器の存在は、この集落の特殊な地位を示すものか、あるいは多くの集落に少數ずつもたらされたものが、運良く限られた調査面積で出土したものか、判断に窮るところではある。しかし、溝における祭祀自体は特異なものではなく、手焙形土器が溝における祭祀の一部を担うに過ぎない出土状況からみると、特定1器種の存在でこの集落を差別化してしまうことは慎重にならざるをえない。博多区の那珂河遺跡でも、49次調査（1994年）で検出された庄内～布留式並行期の溝から手焙形土器の腹部破片が出土しており（註）、既報告の西新町遺跡出土例（池崎ほか1982）も合わせて市内で3例の出土を数えるようになった手焙形土器は、庄内～布留併行期の他の集落にも存在する（した）可能性がある。むしろ、広域にわたる祭祀行為の共通性を、広い分布を示す手焙形土器の存在が支えているような社会状況を想定すべきであろう。

【註】 調査を担当された加藤隆也氏のご教示による。

【参考文献】

塩屋勝利 1970『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 第2集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第9集

塩屋勝利・折尾学 1975「赤水遺跡」「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」65-102頁

下村智 1992「警弥郷B遺跡—第2次調査の報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第278集

池崎謙二・田崎博之・常松幹雄・田中克子・折尾学 1982「西新町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集



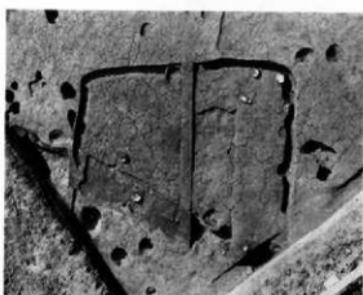
(1) 調査区南半（北東から）



(2) 調査区北半（北から）



(3) SP-22（北から）



(4) SC-05（東から）



(5) SC-05とSD-04（西から）



(6) SC-06（東から）



(1) SB-01 (東から)



(4) SD-01・SD-03 (北東から)

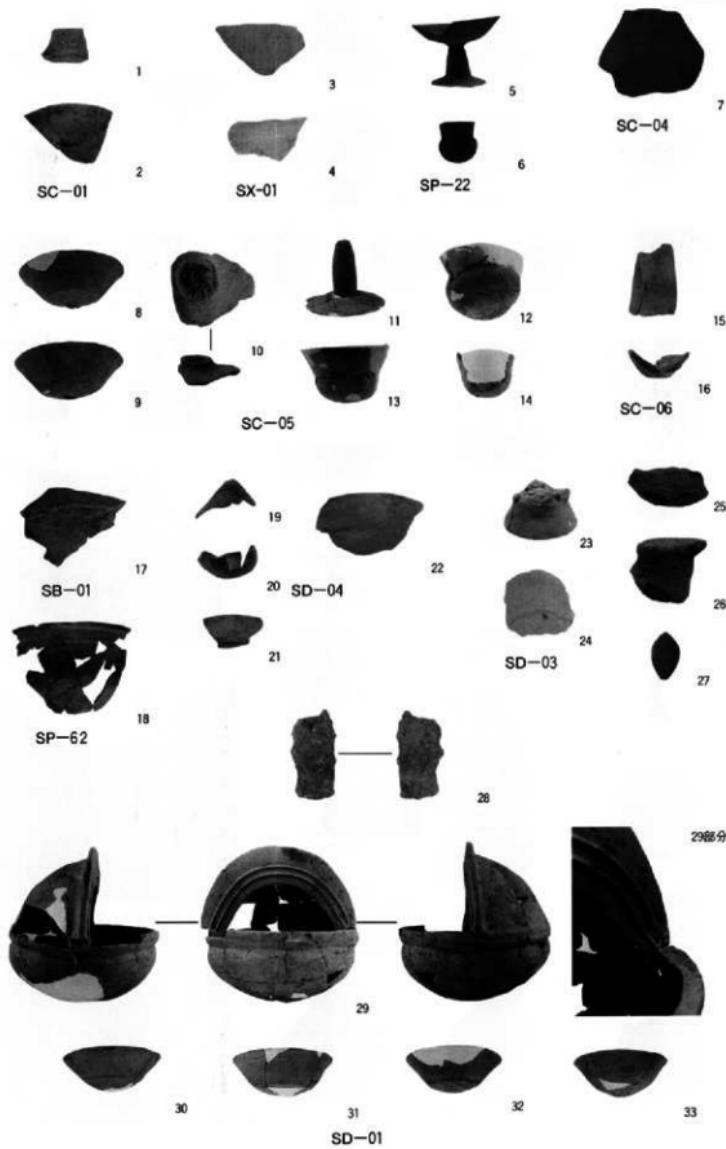


(3) SD-04 (南西から)

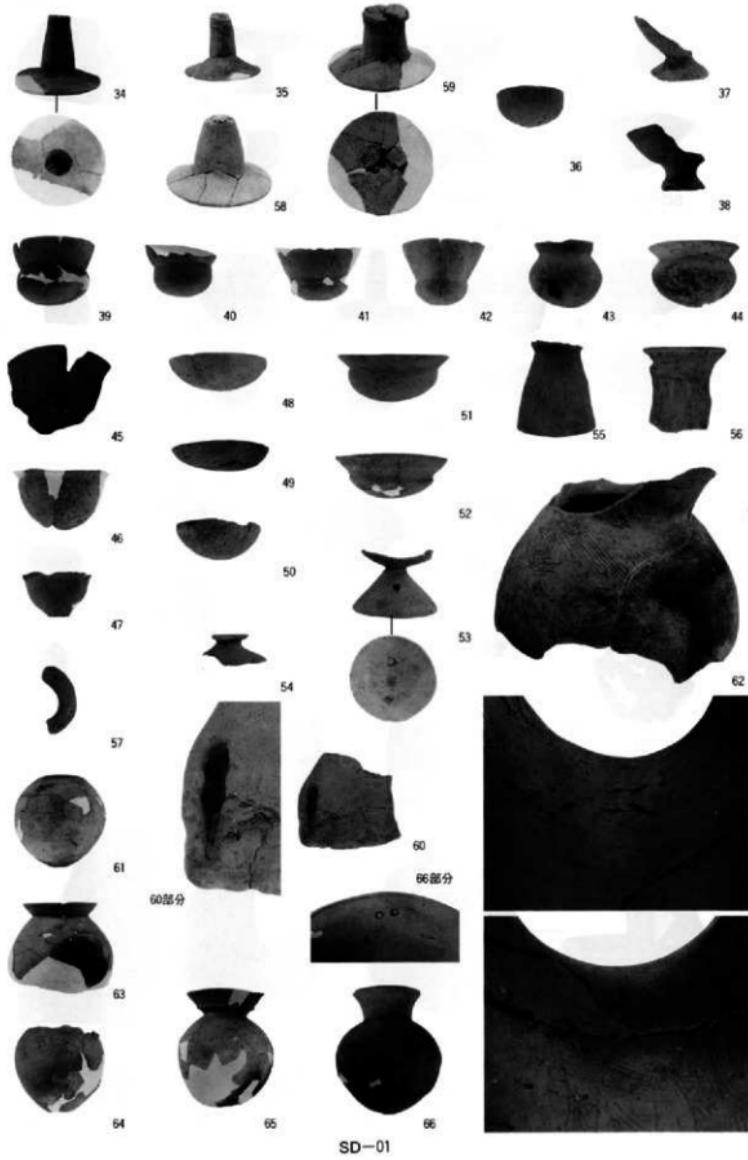


(5) SD-01鉄斧出土状況 (南東から)

PL. 3



PL. 4



警弥郷 B 遺跡 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第414集

平成 7 年 (1995) 3 月 31 日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8-1
(092) 711-4667

印 刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂 1 丁目 10-15
(092) 451-0027

